

(株) PLUS ONE

代表取締役

PICK UP

THE PERSON

太田
祐二

KEY WORD

温度

— ondo —

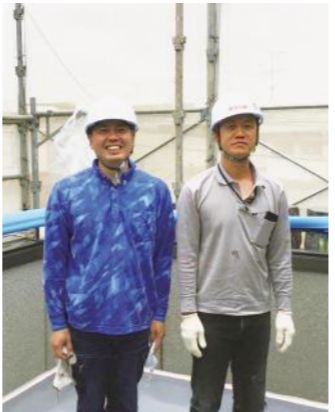
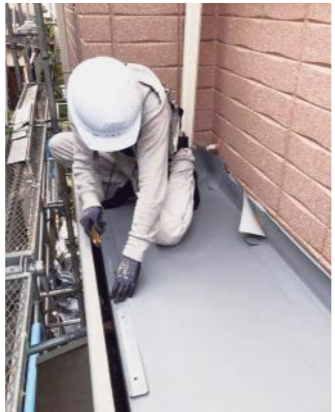


「管理職と現場の温度差を埋める。
私はそういう存在になりたいのです」

東京都江戸川区で、施工会社などの防水施工を請け負う『PLUS ONE』。
太田社長の同級生や前職の会社で一緒に働いた経験のある従業員がいることで、フラットな信頼関係ができており、技術力を共有できるのが同社の強みだ。そして、同社の最大の特徴は社長と従業員との温度差がないことだろう。
「社長と従業員」という立場で壁を作ったり一方的になったりせず、社長の考え、従業員の考えをお互いが汲み取り、意思の疎通を行っている。
「私は現場と管理職の温度差をなくし、お客様に信頼される良い仕事を納めたい」立場は違っても同じ温度で仕事に向き合うことこそが、同社の成功の秘訣なのだ。



株式会社 PLUS ONE
東京都江戸川区東葛西 2-35-10



職の会社の社長が仕事を下さり、それが大きな支えになりました。そこから、一般の仕事や取引先を増やしていったという経緯があります。知人に紹介していただいたこともたくさんあります。その様に周りの方々に助けていただくことも多く、本当にありがたかったですね。

——人の縁というのは本当にありがたいものですね。現在御社は何名でお仕事をされていますか？

現在は私を含めた社員約6名と、協力会社の方が数名入って下さっています。仕事を続ける上で最も大切なのは、信頼を築き育てていくこと。仲間には小さな嘘でも付かないように、誤魔化さないように心がけています。仕事を手掛ける仲間同士信頼しあえたら、必然的にお客様にも信頼していただくことができると思うのです。

——お話は尽きませんが、最後に5年先10年先の社長の夢や目標をお聞かせ下さい。

当社は現在二次請けの仕事を中心にしていますが、今後は一次請けとなるお誘いを受けているんです。そのお話が前に進んだ時には、職人ファーストを心がけたいと思っていますよ。管理する側と現場の温度差は、やはり問題だと感じます。そこに対して当社が潤滑油になって温度差を埋めたいと考えています。私のように、現場上がりで管理もできる立場の人はたくさんいますが、いざ立場が変わると対応が変わったり苦労したりすることもあるでしょう。私はその辺りも押さえながら、そして現場で苦労していることもしっかり吸い上げられる、そんな環境づくりをすることを今後の一つの目標にしているんですよ。

社長の人生の師匠、親方の存在

●太田社長が本格的に防水工事の世界に入り、一番最初に影響を受けたのは、修業時代の親方の存在だったという。「若い時の私が初めて『カッコいいな』と思った人であり、私の仕事のルーツになった人です」と社長。見た目は紳士的だが、いざ現場に出ると職人気質でかなり厳しい人物だったそうで、中には合わずに離れてしまう人もいたのだとか。しかし、そんな姿を見て親方は「人を大事にしないといけない」と気づき、以降は人が変わったのだという。「私は、人を思い変わることができた、そんな親方のことがもっと好きになりましたね」と社長は笑って話してくれた。親方

の人に対する思い、柔軟にものごとを受け入れる度量は社長にとってとても大きな学びとなったに違いない。

●そんな親方から教わったことは他にもある。それは「損して得を取れ」の精神。「仕事は選ぶのではなく、与えられたものをしなさい。そのうちに結果は付いてくる」——親方のその言葉は、今でも社長の心に残っているのだという。独立し、自分で会社を手掛けていく中で、親方の言葉を実感し「間違っていなかった」と確信することができたのだとか。社長にとって親方の存在は経営者としてのみならず、人生の大先輩であることが窺えた。



代表取締役 太田 祐二

東京都江戸川区出身。10代で販売店の倉庫整理・防水業・運送業・解体業など様々な仕事を経験。18歳の時に結婚・奥様の妊娠をきっかけに防水業へ戻ることを決意。約10年の修業を経て29歳で独立を果たす。現在は約6名の従業員と協力業者を牽引し、職人たちのチームワークの良さを強みに事業を展開している。



皆が同じ熱量で事業に邁進し、業界で信頼を集める防水工事業者

東京都江戸川区で、ハウスメーカーなどから請け負った防水工事を手掛ける「PLUS ONE」。約6名の従業員と協力業者を牽引し、チームワークの良さを強みに、職人たちを大切にしている。同社の太田社長は職人として修業を積んだ時から独立を意識し、経営者になった今は業界の在り方に変化をもたらすために、職人ファーストの時代を目指している。本日は社長のもとを俳優の大沢樹生氏が訪問。インタビューを行った。

——早速ですが太田社長の歩みからお聞かせ下さい。

東京都江戸川区出身です。小学生から中学生まで野球に打ち込んでいました。高校ではやんちゃをしましてね（苦笑）。中退後、中学時代からの知人のつながりで、倉庫整理や店舗スタッフのアルバイトをはじめ、解体業や運送業など、様々な経験を積みました。今現在につながる防水の仕事もこの時に出会ったんですよ。

——お仕事としては現場関係の仕事が多かったんですね。では防水のお仕事に本格的に入られたきっかけとはなんだったのですか？

結婚と妻の妊娠がきっかけで「やはりきちんとしないと」との思いが芽生えたんです。そこで友人に「何かできる仕事はないかな？」と相談すると、防水関係の仕事を推されたことで、この業界に戻ることを決めました。友人は今でも一緒に働いているんですよ。

——そうだったのですか。では、戻られた当時から独立心があったのでしょうか。ええ。当時は「職人として、最終目標は

独立だ」と考えていましたよ。防水関係の会社に改めて入社した時も、当時の社長に「最終目標は独立です！」と伝えていたほど（笑）。そのころ勤めた会社はハウスメーカーの仕事を中心にしており、親方に付いて、教えて貰うというよりは「見ながら覚えなさい」というスタイルで、私は独立を目指しがむしゃらに技術を吸収していききましたよ。

——若さもあつたのでしょうか。そちらには何年お勤めになられたのですか？

2012年、29歳で独立を果たしたので、約10年勤めさせていただきました。独立はゴールでありスタートと考えており、一緒に仕事をしようと言っていた仲間が30歳の節目を迎えたこと、そして東日本大震災を経験したことで独立への気持ちが強くなっていったんです。最初は友人と2人でスタートして、実際の現場には応援の人たちが入っていただきました。そこから徐々に人が増えて、2年で法人化を果たしました。お恥ずかしい話ですが、当時の私は考えが甘く、見切り発車で独立したので、最初は仕事がなくて苦労しました。そんな時、前



●ゲストインタビュー！
大沢樹生
（俳優）

「事業を進めるにあたり、共に現場で働く人たちの『温度差』を強く意識しているとおっしゃった太田社長。新しく入られた従業員さんに対しても、仲間の皆さんがちゃんと社長の考えを伝えることで良い関係が生まれているそうです。社長と従業員さんたちが、いかに同じ温度を共有できているかが窺えましたよ。業界全体に社長のお考えが広まってほしいですね！ 私もお応援していますよ！」